

曾我蕭白と英一蝶

馬淵 美帆（神戸市外国語大学）

本発表では、曾我蕭白が、作画に際して英一蝶の本画や画譜の図を参照していたことを指摘し、その背景について考察する。

蕭白の《蹴鞠寿老図》（京都国立博物館蔵）は、一蝶画を意識して描いた作品と見なされる。蕭白が作画に用いた大岡春ト『和漢名画苑』には、一蝶筆の蹴鞠寿老図が掲載される。また、一蝶《唐子寿老人図》（個人蔵）や、鈴木鄰松が一蝶画を模写したという『一蝶画譜』掲載の寿老人図には、大きく反らした頭部の表現が蕭白画に酷似する寿老人が描かれる。そうした特徴を備えた一蝶による蹴鞠寿老図が別に存在し、それを蕭白が参考にした可能性が高い。

英一蝶が一蝶画を模写したという、宝暦2年（1752）刊の画譜『画本図編』を、蕭白は直接参照したと考えられる。同書「萩にしか」図は、蕭白が曾我二直庵の画に加筆した《山月に萩鹿図》（個人蔵）に利用される。また、同書「瀧の獅子」図は、左右反転して《唐獅子図》（朝田寺蔵）の昨形の図に利用される。同書「寒山拾得」図の拾得のポーズは、左右反転して《竹林七賢図襖（旧永島家）》（三重県立美術館蔵）の箒で竹の雪を払う童子に利用される。同書「剣研鍾馗」図は、《鍾馗と鬼図》（四日市市立博物館蔵）に利用される他、鍾馗の顔貌が《鍾馗と鬼図》（個人蔵）にも用いられる。

また、蕭白の《鳥獣人物図押絵貼屏風》（西蓮寺蔵）中の猿猴図（もと掛幅画か）、《馬図》（個人蔵）、自句賛がある俳画の《布袋図》（朝田寺蔵）は、それぞれ『一蝶画譜』掲載の「舟に乗猿猴」図、鈴木鄰松が一蝶画を模写したという『群蝶画英』掲載の「やなぎに馬」図、『英筆百画』中の鄰松の補作「布袋和尚」図に似ており、これらの画譜の図に類似する一蝶画を参考にした可能性がある。

『画本図編』は、明和元年（1764）頃の伊勢地方での複数の障壁画に利用することから、旅行に携行したと想定される。これら障壁画への図様の利用は、全体構想の一部としてのもので、作画の便宜のためという側面が強い。一方、『画本図編』も含む一蝶画の、掛幅画等への利用では、特に俳諧的・戯画的な一蝶画をモデルに、一蝶風の作品を制作しているといえる。

蕭白は俳諧文化との関わりが深く、伊勢や播磨の地方でも京都でも、俳諧関係の交友があった。顧客の俳諧的・戯画的な画への需要に応えるために、そうした一蝶画をモデルにしたと想定できる。さらに、当時の伊勢や上方・播磨では蕉門俳人による蕉風復興運動が盛んであり、松尾芭蕉との交流が知られる一蝶の画が、俳諧文化において珍重されていたことが考えられる。殊に伊勢では、一蝶ゆかりの亀山を中心に一蝶画愛好があった可能性が高い。上記地域で一蝶画の新たな入手が困難な中、蕭白による一蝶風の作画は、一蝶風の画を求める顧客の希望にかなうものであり、一蝶のユーモアを借りてそれをアレンジした蕭白の作品は、俳諧好きの顧客を喜ばせたと考えられる。